

韓国語母語学習者における「こう」「そう」の使用

猪股来未（麗澤大学大学院生）

要 旨

本稿は、指示詞、感動詞としての使用が連続的な語彙形式「こう」「そう」について、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』より、韓国語母語の学習者の使用を調査した。その結果、以下のことが明らかになった。(1)「こう」は眼前、形状、動作の説明で、「そう」は相手に対する肯定的な応答でそれぞれ使用し始め、レベルが上がるにつれて、使用の幅が広がっている。(2)「こう」「そう」ともに、使用場面と結びついた表現的使用から始まり、やがて談話機能を伴うものへと使用が広がるという共通性が見られた。このことから、学習者は習得が進むにつれ、その時々「こう」「そう」を、文脈と結び付けて使用し、使用の幅を広げていく中で、結果的に「こう」「そう」それぞれの体系が形作られている可能性が示唆された。

【キーワード】：多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) 韓国語母語学習者
こう そう

1. はじめに

「こう」「そう」は、指示詞、感動詞としての使用が連続的であると指摘されており（北野2000、定延2002、小出2011）、指示詞の中でも使用範疇の広い語彙形式である。また、学習者においても、副詞の中で「そう」の使用頻度が高く、上級での「こう」の使用頻度の高さも指摘されている（島崎2019、山内2003）。しかし、学習者がこれらをどのように使用し、発達させているか調査した研究は管見の限り見当たらない。第二言語の学習は、目標言語とも母語とも異なる自律的な言語体系（中間言語：Selinker 1972）を作っていくとされ、習得の過程を捉えるには、学習者自身がどのようなプロセスで言語体系を作っていくのかを明らかにする必要がある（大関2013）。指示詞においても、各語彙形式の使用を観察し学習者がどのように使用を発達させていくかを明らかにする必要があるだろう。そこで本稿では、指示詞の語彙形式「こう」「そう」に焦点をあて、学習者がどのように各語彙形式の使用を発達させているか調査を行う。

2. 先行研究および本研究の目的

日本語指示詞の習得研究では、コ・ソ・ア3項の使い分けをテストなどでみたものが多く、学習者がどのように語彙形式を使っているかをみた研究は少ない。学習者における指示詞の語彙形式の使用を見た研究に、迫田（1998）、猪股（2015）があげられ

る。迫田は、対話調査及び、選択テストを行った結果、学習者の「その」「あの」の使用は、後続が抽象名詞か具体名詞かで左右される傾向にあり、コ・ソ・ア3項の対立からではなく、言語使用場面に合わせ使用している可能性を指摘した。学習者は言語処理の負荷を軽減するためにchunksで記憶する傾向があり (Skehan 1998)、迫田の結果もそれに沿うものだと考えられる。ただし、chunksで始まったコ・ソ・アの習得が、その後どのように発達し、文法化されていくかは明らかになっていない。

また、猪股 (2015) は、OPIインタビューデータ「KYコーパス」より、英語母語話者の「これ」「それ」、「この+名詞句」「その+名詞句」の使用を、後続のパターン、および機能の面からレベル別に調査を行った。その結果、「これ」はトピック指示での使用から、「前置き」「割り込み」などの談話機能での使用、「それ」は、句を指示するものから、句を超えた長い文脈を括約する機能へと変化し、それぞれが異なる発達を遂げている可能性を指摘した。また、「この+名詞句」は、既に聞き手と共有している内容を示し、「その+名詞句」は、初めのうち、文脈から想起されるが言語化できないものに対し、「そのもの」や、「そのところ」のように使用され、同じコ系、ソ系指示詞であっても、言語形式により使われ方は異なっていると述べている。

それでは指示詞の他の形式はどうだろうか。様々な指示詞の形式のなかで、学習者に初級で明示的に「指示詞」として体系的に提示されるものは限られており、副詞「こう」「そう」「ああ」を指示詞として体系的に提示している教科書は、管見の限りほとんど見られず、表現として触れられる程度である¹⁾。一方で、ジェスチャーを伴う指示詞「こう」の使用と感動詞「こう」の使用が、言語表現を生成する際に発せられるという点で連続性が指摘されており (小出 2011)、指示詞「そう」も「先行文脈への言及」という点で、感動詞「そう」との連続性が指摘されており (北野 2000、定延 2002)、「こう」「そう」は極めて使用範疇の広い語彙形式であるといえよう。学習者の使用においても、副詞における「そう」の使用率の高さや、上級での「こう」の使用頻度の高さが指摘されている (山内 2003、島崎 2019)。また、島崎 (2019) では、韓国語母語話者の上級の「こう」の使用が日本語母語話者の使用と類似すると述べられている。しかし、学習者がどのように「こう」「そう」を使用し、変化させているかまでは述べられていない。それでは、このような、学習者に体系的に示されず、かつ使用範疇の広い語彙形式が、学習者の中でどう発達し、どのように体系づけられていくのだろうか。そこで本稿は、学習者が使用する語彙形式「こう」「そう」に焦点を当て、レベルによる使用の違いを調査し、その変化の過程を明らかにしていく。

3. 研究方法

データは、国立国語研究所のプロジェクトによる成果『多言語母語の日本語学習者の横断コーパス：I-JAS』(および検索システム)の、対話データを利用した(中納言 2.4.2、データバージョン 2019.05 版)。これは日本人インタビュワーによるインタ

ビューのデータで、質問内容がレベルにかかわらず、ある程度統一されており、時間も約30分にコントロールされている（迫田他2016）。このうち、日本語と同じ3項の対立体系を持つ韓国語母語学習者50名のデータ（第1次、第2次公開データ）を対象とした。学習者を日本語能力自動判定テスト（J-CAT）の総合得点から互換表に基づき（日本語教育支援協会）JLPTレベルに分け、N4以下を初級、N3を中級、N2以上を上級とした。内訳は初級が12名、中級が13名、上級レベルが25名であった（表1）。文字化データから、「こう」「そう」およびその後続の形式を抽出し、傾向を調査し、前後の文脈から機能の分析を行った。研究課題は以下のとおりである。

1. 韓国語母語学習者は「こう」「そう」をどのような形式・機能で使用しているか。
2. 韓国語母語学習者の「こう」「そう」の使用は、レベルにより異なるか。
3. 韓国語母語学習者における「こう」「そう」の使用は、母語の使用と同様の使い方であるか。

なお、「ああ」は、本データでは韓国語母語学習者の使用が見られなかったため、本稿では「こう」「そう」のみを対象とする。「ああ」の使用は、I-JAS 第4次データまでの全ての学習者825名（JFL 環境12ヵ国語母語、国内教室環境、自然習得学習者）の中で、4名しかみられず、複数例使用していたのは2名のみであった。同データの日本語母語話者の使用をみたところ、「ああ」は、30例中共有情報に対する使用が24例と多かった。学習者では、そもそも初対面の日本語母語のインタビュワーとの間に共有情報が少ないことや、学習環境において、母語話者の使用のような状況でのインプットが乏しいことも可能性として挙げられる。

表1 韓国語母語学習者レベル別の人数

レベル (J-CAT 総合得点)	人数
上級 (N2 レベル以上) (250～)	25名
中級 (N3 レベル) (200～249)	13名
初級 (N4 レベル以下) (~199)	12名
合計	50名

4. 結果と考察

4. 1. 「こう」「そう」使用者数、使用頻度

表2に韓国語母語学習者の「こう」「そう」使用者数・使用頻度を示す。韓国語母語学習者50名全てが「そう」を使用しており、そのうち24名は「こう」を併用していた。「こう」を使用した学習者は、初級で、12名中3名（25%）、中級で13名中4名（31%）、上級25名中17名（68%）と、レベルが上がるにつれて割合が大きくなっていった。使用頻度においても、各レベルで「そう」が「こう」を上回っていた。また、「こう」「そう」ともに、中級以下のレベルと比べ、上級レベルの使用が多く、2倍以上の違いが見られた。以上のことから、インタビュー場面において、学習者はレベル

が低いうちから「そう」を使用する傾向にあるが、中級レベルまでは頻度はあまり変わらず、上級レベルで使用が増える傾向にあることが明らかになった。一方、「こう」は、「そう」ほどの使用は見られず、上級レベルで使用を伸ばす傾向にあると考えられる。

表2 韓国語母語学習者「こう」「そう」使用者数・使用頻度
(括弧内は一人当たりの使用頻度)

	こう		そう	
	使用者数	使用頻度	使用者数	使用頻度
上級 (N=25)	17名	122 (7.17)	25名	893 (35.72)
中級 (N=13)	4名	5 (1.25)	13名	166 (12.70)
初級 (N=12)	3名	3 (1.00)	12名	147 (12.25)
合計 (N=50)	24名	130 (5.41)	50名	1206 (24.12)

4. 2. 「そう」の使用

4. 2. 1. 後続の形式

韓国語母語学習者の使用で見られた後続の形式および人数の割合を表3に示す。後続の形式は、「そう」単独または「です」などの助動詞がつく「そうです系」(7種)、「そう」の後に動詞が続く「そうV」系(7種)に大きく分けられた。また、「そうV系」は、さらに①「いう」が続くもの、②「思う、感じる、考える」などの話し手の認識を示す動詞が続くもの、③その他の動詞が続くものに分けられた²⁾。1人当たりの

表3 「そう」形式別使用者数(レベル別使用者割合)

		初級 12名	中級 13名	上級 25名	
そうです系	そう/	9名 (75%)	10名 (77%)	20名 (80%)	
	そうです	6名 (50%)	10名 (77%)	23名 (92%)	
	そうですね (よ/か)	8名 (67%)	7名 (54%)	21名 (84%)	
	そうですけど	1名 (8%)	3名 (23%)	15名 (60%)	
	そうらしい	0名 (0%)	0名 (0%)	4名 (16%)	
	そうではない	0名 (0%)	4名 (31%)	8名 (32%)	
	そうだったら	0名 (0%)	2名 (15%)	3名 (12%)	
そうV系	さういう～	さういうN	1名 (8%)	4名 (31%)	16名 (64%)
		さういうN (否定)	1名 (8%)	2名 (15%)	5名 (20%)
		さういう	0名 (0%)	2名 (15%)	7名 (28%)
		さういうんじゃない	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (4%)
	さう思う	さう (だど) 思 (う)	3名 (25%)	4名 (31%)	11名 (44%)
		さう思わない	1名 (8%)	1名 (8%)	1名 (4%)
	さうV (その他)	さうV	2名 (17%)	4名 (31%)	12名 (48%)

使用形式の種類を調査したところ、初級で2.16種類、中級で4種類、上級で5.92種類と、レベルが上がるにつれ増加していた。

各形式を使用した人数の割合をみると、学習者の7割以上の使用が見られたのが、初級レベルで「そう/」のみだったのに対し、中級では「そう/」「そうです」、上級レベルでは、それに加え、「そうですね（よ/か）」などの終助詞を加えたものと、使用に広がりが見られた。各レベルの5割以上が使用している表現と合わせてみると、初め「そう/」という短い発話から、「～です」が加わり、その後終助詞が付加され、「～ですけど（/～し など）」といった発話を継続させる表現を使用していくという可能性が考えられる。また、中級では「そうだったら（/～なら/～と）」が、上級ではそれに加え「そうらしい（/～だろう など）」など、少数ながら助動詞や接続助詞を伴う使用も見られ、「そう」「そうです」で固定されていた使用からの広がりが感じられる。

一方「そうV系」は、初級レベルでは使用者が他のレベルに比べ少なく、最も多くて「そう（だと）思う」の3/12名（25%）であった。これは、判断を示す「そう」に、話し手の認識を付加した使用であり、このレベルで使用する者が多い「そう/」に関連した使用だと考えられる。中級からは、「そういうN」「そうV」といった形式も、「そう（だと）思う」に並び使用されていた。特に「そういうN」は上級では学習者25名のうち使用者が16名と64%を占め、学習者は「そういうN」を一つのかたまりのようにして、談話の中で使用していると考えられる³⁾。一方で上級では「そうV」という自由度の高い形式も半数近くが使用していた。以上のことから、形式において、学習者は「そう/」という短い発話から使用が始まり、やがて「～ですけど」といった発話を継続させる表現や、助動詞や接続助詞を併用したものと使用を広げ、また、「そういうN」というかたまりでの使用が見られる一方で、「そうV」といった自由度の高い形での使用も見られ、「そう」の使用を広げている可能性が示唆される。

4. 2. 2. 使用機能

韓国語母語学習者の「そう」の機能について、その産出例をもとに分類し、レベル別使用者数およびレベル別使用者割合を調査した（表4）。産出例から、会話のやり取りを遂行するために使用しているとみられるもの（「会話機能」）、談話のまとまりを構築するために使用しているとみられるもの（「談話機能」）の2つに大きく分け、さらに前者を「肯定」「応答」「思案」「受容」、後者を「前方照応」「後方照応」に分類した。「会話機能」「談話機能」の使用を観察すると、会話機能のいずれかを使用している者は初級レベルでは12名全員、中級は12/13名、上級は24/25名であり、ほとんどが使用していた。一方で、談話機能では、前方照応あるいは後方照応のいずれかを使用している者は、初級6/12名（50%）、中級8/13名（62%）、上級23/25名（92%）と、レベルが上がるにつれ使用者数に広がりが見られた。このうち、「そう」を談話機能のみで使用していたのは上級・中級レベル各1名であり、ほとんどが会話機能と

表4 「そう」機能・レベル別使用者数（レベル別使用者割合）

機能		例（筆者作例）	初級12名	中級13名	上級25名
会話機能	肯定	A：今忙しいですか。 B： <u>そう</u> 、忙しい。	11名(92%)	11名(85%)	24名(96%)
	応答	A：ここは静かなので、(B：へー)、 <u>そう</u> 、住みやすいです。	6名(56%)	7名(54%)	14名(56%)
	思案	A：Bさんはどう思いますか。 B： <u>そう</u> ですねー。あの一、私は…	2名(17%)	2名(15%)	13名(52%)
	受容	A：私はいいと思いますけど B： <u>そう</u> ですかー。	3名(25%)	4名(31%)	12名(48%)
談話機能	前方照応	A：お金の方が大切という人もいますね。 B： <u>そう</u> いう人もいますが…	5名(42%)	8名(62%)	23名(92%)
	後方照応	例(6)参照	1名(8%)	1名(8%)	2名(8%)
その他		引用節中の使用、「 <u>そうだ</u> 」「 <u>そうか</u> 」、 「 <u>そう</u> しようって言いました」	1名(8%)	1名(8%)	7名(28%)

の併用だった。また、これら大別する二つの機能のほかに、「その他」として、引用節中の使用や、思い出し、気が付いた際の「そうだ」「そうか」などの独話的な使用も見られた。

会話機能では「肯定」「応答」「思案」「受容」のうち、全てのレベルで最も多く使用していたのは、「肯定」であり、肯否を問う問いに対して肯定的な答えを返す際や、聞き手に対して同意を述べる際に使用されていた。「肯定」で使用された形式をレベルごとに見ると、初級で6種類（「そう」「そうです」「そうですね」「そうですけど」「そういうN」「そう（だと）思う」、中級では前述の6種類に「そうだったら」「そういう」「そうV」を加えた9種類、上級では否定表現4種を除いた全ての形式10種類と、レベルが上がるにつれて使用する形式の幅が広がっている。また、「肯定」の中には、単に相手の意見を肯定するだけでなく、(1)のように、「そうですけど（/が）」と、一度相手の意見に同意しつつ、その後異論や情報を付加するような使用も見られた。この(1)は会話機能「肯定」に分類したが、直前のKの発言を指しているとも言えることができ、談話機能の「前方照応」の使用に通じるものがあると考えられる。

(1) 上級 (KKD27) (C：インタビューー、K：学習者)

K：まあでも一外国人の方は結構労働者の方々は、東南アジア系とか一、〈は一〉
あと日本とかアメリカで来はる一あの企業の方々は結構ちょいちょいお見えに
なっていますけども、それ以外

C：じゃあ国際的な町なんですね

K：その工場団地の、あの一半径一キロ〈ふーん〉ぐらいはそうなんですけど、ふ
つ、他のところはまあ、畑だけです

また、「応答」も全レベルで半数以上が使用していたが、これは(2)(3)のように、相手の反応への反応や、自分の発話内容に対する反応で、肯定的な意見を述べるという意味合いは薄く、この点が「肯定」と異なる。また、間髪入れずに話が続くことから、考察中という意味合いの「思案」とも異なっている。なお、このような使用は、同データの日本語母語話者50名の産出例では、3例のみであった。

(2) 上級 (KKD04)

C: えっと誰の作品ですか?

K: そう最初の作が、あー、う『姑獲鳥の夏』という〈ふーん〉小説で有名ですけど

(3) 初級 (KKD30)

K: 友達、私が一高校、高校時代の三年生で〈はい〉あの、勉強を、勉強、しした
〈はい〉、そう、でも私の友達は、勉強全然しませんでしたから〈うんうん〉

その他、(4)のような、次に述べることを思案する際の使用(「思案」)では、上級以上で半数以上の使用が見られた。これは、「考察中であることを表す際のつぶやき」という点で、定延(2002)の「フィラーの「そう」」にあたるものであるが、22/42例と約半数が相手の質問に回答する際の冒頭部分に出現し、また、41例が「そうです(ね)」と丁寧体で見られることから、母語話者ほど独話的ではなく、聞き手を意識した使用(定延2002)に偏っていると考えられる。

(4) 上級 (KKD27)

C: あっらー、何年前?

K: ええとそうですね、あのーたぶん三年ぐらい前です

「思案」以外では、「そうですか」などの形で、相手の発話を受け止める際の使用(「受容」)も、上級では半数近く使用され、広がりを感じられる。ただし、この「思案」「受容」での使用形式は、どちらも「そうです」「そうですね(/か/よ)」のみであり、「肯定」ほどの広がりは見られなかった。この2つの機能は、「肯定」と同様に初級前半で定型表現として提示されることが多いが、この結果を見ると、実際に使用されるのは言語発達が進んでからであることが示唆される。このことから、学習者は「そう」を、相手に対する肯定的な応答を中心に、聞き手を意識した会話機能へと使用を広げる一方で、定型表現的な使用から始め、様々な形式へと使用を発達させつつ、談話機能の「照応」へと使用機能も広げている可能性が示唆される。

一方、談話機能では、「前方照応」での使用が多く、「後方照応」の使用はわずかであった。「前方照応」はレベルが上がるにつれ、使用者の割合が高くなり、上級では、9割以上が使用している。「前方照応」で使用される形式も、初級では「そう/」「そういうN」の2種類であったのに対し、中級では6種類(「そう/」「そうですけど」「そうだったら」「そういうN」「そういう」「そうV)、上級では、8種類(「そう/」「そうですね」「そうですけど」「そうらしい」「そういうN」「そういう」「そうV」「そう(だ)と思う)」と使用が広がり、特に「そうV系」で使用者の割合が高くなるなど、

より自由度の高いものへと使用の幅が広がっていた。

また、使用を観察すると、(5)のように、「～たり」や「～とか」などで例示したものを指示し、括約して述べているものが多く見られた。(1)の「肯定」での「前方照応」との連続的な使用も踏まえて考えると、相手に対する肯定的な応答から、前の文脈を指示するものへと使用が広がり、やがて談話にまとまりを持たせる際の使用へと使用を変化させている可能性が示唆される。

(5) 上級 (KKD28)

K: その中で一番お姉さんだったんですね〈はい〉私は、で、なんか [笑] 子供達が誤っても私が叱られたり〈うん〉そうゆうのが子供としては〈はい〉少し、また(6)の下線部は「後方照応」の例である⁴⁾。まず「そう」を使用し、概要を短く提示し、後に詳細を述べており、まとめて長く話すよりも負荷のかかからない、学習者ならではの使用であると考えられる。なお、韓国語では、後方照応はコ系にあたるi系を用いるとされ(金井他2011)、母語とも異なる使用となっている。

(6) 初級 (KKD19)

K: 私の日本の友だちが韓国に来て〈うんうんうん〉、あの一友だちの中で〈うん〉誕生日の、人は、誕生日の人かな〈うんうんうんうん〉人は、います

C: あーそうですか、日本人ですねじゃあ

K: はいそう、はい、日本人です〈んー〉、そう私に、聞きました、なんかケーキ、スペシャルー、あサプライズ、〈うんうん〉パーティーの、あーし、できる店があるの?〈うんうんうん〉と言って、あ聞いていましたけど、けど、〈うんうんうん〉韓国では全然ないときあ、答えました

以上のことから、談話機能としての照応は、レベルが上がるにつれ、使用人数や、形式の種類が増え、使用を発達させていることが明らかになった。また、「後方照応」の発話内容を端的に提示し、後から情報を付加するという使用や、先の「前方照応」での、前の内容を括約させるような使用などをあわせて考えると、学習者は「そう」に、談話にまとまりを持たせる機能を担わせて使用している可能性が考えられる。

4. 2. 3. 形式・機能からみる韓国語母語学習者の「そう」の使用

以上、本データの韓国語母語学習者の「そう」の使用を、形式・機能の点から調査したところ、形式・機能両方で使用の広がりが観察される結果となった。初めのうち、学習者は、「そう」を会話のやりとりを円滑に進めていく「会話機能」として、相手の発話に対する応答(肯定)で、「そう/」や「そうです」といった定型表現とともに使用し、やがて言語発達が進むとともに、聞き手を意識した機能へと使用を広げていく可能性が示唆された。その一方で、応答(肯定)で、様々な形式で使用するようになり、やがて前の発話内容を指示し、話を続ける、前の発話内容を否定するといった話に結束性を持たせる「談話機能」としても使用を拡大させていく可能性が示唆された。

4. 3. 「こう」の使用

4. 3. 1. 後続の形式

表5に韓国語母語学習者「こう」の後続の形式別使用者数を示す。本データで見られた後続の形式は、「こうです系」で「こう/」「こうです」の2種類、「こうV系」で「こういうN」「こういう」「こうV」の3種類と、「そう」に比べバリエーションが少なかった。また、使用者数を見てみると、各レベルで半数以上の学習者が使用しているのは「こう/」のみであった。

表5 「こう」形式別使用者数（レベル別使用者割合）

		初級3名	中級4名	上級17名
こうです系	こう/	2名 (67%)	3名 (75%)	15名 (88%)
	こうです	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (6%)
こうV系	こういうN	0名 (0%)	0名 (0%)	2名 (12%)
	こういう	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (6%)
	こうV	1名 (33%)	1名 (25%)	7名 (41%)
	こうVない	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (6%)

「こう/」と「そう/」との使用の違いは、「そう/」は、「応答」「肯定」など、「そう」の後で発話が一度途切れる使用であるのに対し、「こう/」は、使用者20名全てで(7)のような発話を続ける使用が見られ、発話が途切れるものと併用していたのは上級2名のみであった点である。

(7) 上級 (KKD27)

K: どちらか言ったらー事実婚ー主義、主義なんですね〈あーあーあーあー〉、あんまりこう結婚、ってゆう制度に縛られてー〈はー〉、まあ何て言いますかこう好きでもないのに結婚ってゆう制度のせいで一緒に暮らすってゆうことだけはちょっと〈ふーん〉、遠慮しておきたいんでー

この発話を継続させる「こう/」は、各レベル「こう」使用者の半数以上が使用し、上級では17名中15名と、割合が最も大きかった。しかし、「こう」自体の使用者が初級で3名、中級で4名と少ないことから、傾向をみることはできなかった。

4. 3. 2. 使用機能

表6に、本データで見られた「こう」の機能と、その使用者数を示す。本データの学習者の産出例から、①「眼前・動作・形状説明」②「表現の模索」③「状況説明」④「引用直前の使用」⑤「照応（直前の内容を指示）」⑥「後方照応」⑦「結論」⑧「補足・詳細」⑨「その他」に分類した。⑨「その他」は5名中4名が引用節中の使用であった。これらは物事の説明の際の使用が多く、「そう」のような相手とのやりとりを遂行するための会話機能ではなく、談話機能に含まれると考えられる。

これら8つの機能の中で、初級で、少ないながらも複数名で使用していたのは、「眼

前・動作・形状説明」(2名)であった。これは、話し手が今置かれている状況の指示や、動作、形状を説明する際に使用されているもので、中にはジェスチャーと共に使用していると思われるものも見られ、「こう」の中では比較的早い時期から使用される機能であると言える。また、中級では、(8)のような例も見られ、これは話し手自身が経験した情景や状況を描写するという点で「状況説明」のカテゴリーとしたが、過去の情景を今ここにあるかのように描写しており、ジェスチャーと共に使用する「眼前・動作・形状説明」に近いものであると考えられる。

(8) 中級 (KKD50) 〈空港での入国審査の話をしていて〉

C: あ、審査ですね？

K: 審査、審査ですか〈はい〉、はい、審査をするんじゃないですか〈はい〉えっとその〈はい〉、そこで、審査する人たちが〈うんうん〉、まー、こう、あー出入国管理職の人たちです〈うんうんうんうん〉、それを見て〈はい〉

初級、中級でこのほかに使用されていたのは「表現の模索」であった(初級1名、中級2名)。小出(2011)は、学習者のフィラー「こう」の使用について、「なんと

表6 「こう」機能別使用者数(レベル別使用者割合)

	例(筆者作例)	初級 3名	中級 4名	上級 17名
談話機能 (構成に関わる機能)	眼前・動作・形状説明	野菜を <u>こう</u> やって切って… 2名 (67%)	0名 (0%)	9名 (53%)
	表現の模索	A: 小さい頃は、どんな子どもだったんですか B: んー、 <u>こう</u> 、なんていうか… 1名 (33%)	2名 (50%)	7名 (41%)
	状況説明	誕生日は、朝起きると、 <u>こう</u> 、台所で母が私の好きなものを作ってくれていて、 <u>こう</u> … 0名 (0%)	1名 (25%)	9名 (53%)
	引用直前	子どもの時は、母から <u>こう</u> 「遊んでないで勉強しなさい」って怒られてました。 0名 (0%)	0名 (0%)	3名 (18%)
	照応(直前の内容を指示)	「健康のために運動しないのか」って、 <u>こう</u> 言われるんですけど、私はあまり… 0名 (0%)	0名 (0%)	3名 (18%)
	後方照応	<u>こう</u> いうことありませんか。探しているときは見つからないのに、数日後に出てくること。 0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (6%)
	結論	留学中は旅行に行ったり、ホームステイをしたり、ボランティアをしたり、 <u>こう</u> 楽しかったですね。 0名 (0%)	0名 (0%)	5名 (29%)
	補足・詳細	A: 映画、好きなんですか。 B: ええ。 <u>こう</u> 、時間があるとつい見てしまいます 0名 (0%)	0名 (0%)	3名 (18%)
	その他	引用節中の使用、省略 (A「一緒にやりながら、 <u>こう</u> (仲良くなる)。」B「あーなるほどね。」) 0名 (0%)	1名 (25%)	4名 (23%)

うか」「なんか」「～っていうか」「～みたいな」「～という感じ」などの表現とともに、暫定的な表現を用いて述べる際の使用であるという特徴を挙げ、「心的に思い浮かべられた対象を言語化のために分節し、表象的な把握を行うとともに」、「言語化への動きを促進するもの」であると言及している。本稿では、上記の表現と共起しているものを「表現の模索」とした。初級で使用した1名は、このレベルでは最もJ-CAT総合スコアが高い学習者であり、「眼前・動作・形状説明」よりも使用は遅く、中級レベルから使用されると推察される。

一方、上級では「こう」全ての機能に使用者がおり、広がりが見られる。「眼前・動作・形状説明」と並び、最も使用者が多かったのは「状況説明」であった。「状況説明」は、中級で見られた情景描写のほか、(9)(10)のように、経験した出来事を、順を追って話す際の使用も見られた。これらは「こう」を使用し眼前の出来事を実況するかのようにすることで、過去の出来事を描写する負担を軽減させていると考えられる。

(9) 上級 (KKD49)

K: その時はまだ、サンタクロスとか、〈うん〉あると思ってて〈うんうんうんうん〉、ずーと、寝ずに〈うん〉、そのまま、こう〈あ〉、寝ずに一待ってて〈はい〉、でも、やっぱり寝てしまって〈うんうんうん〉、で見たら、あ、家が

(10) 上級 (KKD09)

K: こう大人が〈うん〉こう話しかけてもこう〈うん〉、笑って返事もまともにできないような〈あー〉そうゆう子供でした

上級では「こう」においても「照応」の使用が見られたが、「そう」のような前述の内容を括約するような使用は見られず、(11)のような直前に提示したものを指す使い方がほとんどで、使用が異なっていた。また、(12)のような引用節に入る直前での「こう」の使用(「引用前」)と合わせてみると、これらは直前、直後の内容を指さして、際立たせるような使い方をしていて考えられる。

(11) 上級 (KKD23)

K: 性格自体が〈うん〉消極? 〈うん〉的じゃな、ない、ないので〈うんうん〉すぐ、初めて見た人達も〈うん〉おはようございますとかまあこうやってすぐ

(12) 上級 (KKD11)

K: うちにうちにまで電話して〈うん〉こう「KDさんが悪い友だちと付き合っている」と言われて

上級では、このほか、(13)のように、前の文脈で理由を説明し、後に最終的な意見を述べるものや、話の結びが続くもの(「結論」)、また(14)のように補足やより詳しい情報を加える際の使用(「補足・詳細」)も見られた。これらは話の結論付けや、情報の付加の際に使用されており、「こう」に談話構成にかかわる機能を担わせて使用している可能性が示唆される。

(13) 上級 (KKD04)

K: 韓国*ではその科目〈はい〉、科目より〈うんうん〉全部先生が違うので〈はい〉、まあ〈へー〉、こう親しい先生と学生がその、うーん親しくなるのがちょっと難しいんですね

(14) 上級 (KKD09)

C: でも、田舎ってけっこうその、もちろん人と人の関わり深いですけど、〈うん〉深すぎて、〈あー、ん、んー〉重たいことないですか？

K: あーありますね 〈うん〉、こう、何かあると、みんな知ってる

4. 3. 3. 形式・機能からみる韓国語母語学習者の「こう」の使用

本データの韓国語母語学習者の使用を見ると、学習者は「こう」を、限られた形式で、初めのうちは眼前指示や、自分が置かれている現在の状況に使用したり、時にはジェスチャーを伴わせて動作や形状の説明に使用したりするうちに、脳内にある内容に対する表現を模索する際にも用いるようになり、やがて自身の経験の描写や説明の際への使用へと幅を広げていく可能性が示唆された。また、レベルが高くなると、結論付けや、情報を付加する際にも「こう」を使用し、談話の構成に関わる機能を担わせて使用している可能性も考えられる。ただし、本データでは中級以下の学習者の「こう」の使用が少なく、「眼前指示」や「動作・形状説明」、「表現の模索」が、それぞれどのように発達していくかを明らかにするまでには至らず、今後の課題としたい。

4. 4. 韓国語の指示詞との比較

学習者の母語である韓国語の指示詞は、金(2006)によると、i系、ku系、ce系があり、直示用法の眼前指示(現場指示)では、近称および話し手のなわばり内は「i系」、中称または相手のなわばり内は「ku系」、遠称または話し手、聞き手双方のなわばり外は「ce系」が用いられるという。そして、話し手が存在する場所や状況、時間であれば、目に見えないものであっても、同じように使用されると述べている。一方で、非直示用法の文脈指示では話し手・聞き手のどちらの短期記憶内にあるかで、i/kuが決まるほか、観念指示では、百科事典的な知識ではceを用い、話し手と聞き手の共有知識を探索する場合は、ku系を用いるとしている。また、後方照応については、金井他(2011)によると、i系が使われ、日本語のコ系と並行的であるという。

以上から考えると、今回学習者が「こう」で使用していた「表現の模索」や「結論」などの用法は、観念指示であり、母語では近称で使用されない用法であると考えられる。実際に韓国語母語学習者2名に聞いたところ、(17)は動作を交えて説明するイメージがあり、i系の「こう」にあたる *ilehkey* / *ilkhey* を使用するが、(18)のような場合はi系の語を使用せず、この場合、「なんというか」や思案の「そうですね」(ku系)は用いられるが、このような「こう」は訳しようがないとのことであった。

(17) A：うれしかったこと、ありますか。

B：あ、はい。あの、子どもの時なんですけど、教室に行ったら、こう、友だちが3人並んでいて、私が入ってきたら、誕生日の歌を歌ってくれて…

(18) A：日本人への印象、なにかありますか。

B：そうですねー、なんと言いますか、こう、日本人はあまりはっきり言わないという印象がありますね。

これらを考えると、韓国語母語学習者は、「こう」「そう」で使用していた各機能について、「こう」の観念指示以外は、母語である韓国語の *ilkey* (*ilkhey*)、*kulehkey* (*klkhey*) と対応させて使用することは可能であると考えられる。しかし、実際の使用を見てみると、初級レベルでは「こう」は主に直示的用法で使用され、「そう」は主に「会話機能」として使用されるなど限定的であることや、後方照応に母語と対応していない「そう」を用いるなど、違いが見られた。そして、レベルが上がるにつれ、「こう」を観念的に使用する、母語の *i* にはない使用も見られ、学習者は日本語の「こう」「そう」について、母語とは異なる体系を形付けている可能性が示唆される。

5. まとめ

I-JAS インタビューデータから、JFL 環境にある韓国語母語の学習者の「こう」「そう」の使用を、形式、機能の面から調査したところ、それぞれに担わせている機能は、初級の段階から異なっていることが分かった。学習者は、「こう」を、眼前指示や、ジェスチャーを伴うような動作、形状などの説明での使用から、心的イメージを言語化する際の使用、過去の経験の情景描写や、状況説明の際の使用へと広げており、上級レベルでは、談話の構成を担わせた使用へと発達させていた。これに対し、「そう」は、初めは相手とのやりとりを遂行する会話機能として、主に相手に対する肯定的な応答での定型表現的な使用から始まり、日本語レベルが上がり、使用形式が増えていく中で、「そう」の相手の意見に対する肯定という固定的な意味合いが薄れ、「受容」「思案」などの聞き手を意識した機能や、話のまとまりを作る談話機能へと使用を広げていく可能性が示された。また、上級へとレベルが上がるにつれ、母語である韓国語では見られない使用も観察されており、学習者は母語の指示体系とも異なる「こう」「そう」の体系を形づくっていると考えられる。

このことから、学習者は、初めからコ系とソ系の対立関係を作り使用しているのではなく、「こう」「そう」どちらも使用場面と結びついた表現での使用から始まり、やがて談話レベルに使用が広がり、結果的にコ・ソの対立体系が形作られている可能性が示唆される。これは、言語習得は *rule-based* よりも *item-based* で進むという「使用依拠モデル」(Ellis 2002 他) に沿うものであり、また言語の習得が進むにつれ、結果的にシステムが構築されていくという創発主義 (*emergentism*) 的な言語観 (Ellis & Larsen-Freeman 2006) にも沿うものであると考えられる。また、この学習者の使用

を教育の面でとらえてみると、教授者は、初級段階で、数種の指示詞の語彙からコ・ソ・ア3項の指示体系を提示するだけでなく、学習者の日本語の発達に応じて、授業内で、個々の語彙形式の文脈内での使用を積極的に取り入れていくことが大切であると考えられる。

本調査では、初級・中級の「こう」の使用が少ないという結果となった。しかし、扱ったデータがインタビューデータということもあり、眼前指示の機会がそもそも少なく、結果的に初級・中級での使用が少なくなった可能性も考えられる。初級・中級の過程を見るためにも、眼前指示も含まれる状況での発話を扱う必要があるだろう。また、本データでは「ああ」の使用が見られず、傾向を調査することができなかった。これは初対面の日本語母語話者とJFL環境学習者という共有情報の少ない者同士の会話であったことも要因として挙げられ、例えば学生と関わりのある教授者との会話など、情報を共有する者同士であれば結果が変わっていた可能性も考えられる。今後は、発話状況や、発話者同士の関係性も考慮し、調査を続けていきたい。

注

- 1) 提示されていたのは、『新装版基礎日本語文法教本』（西口2011）（指示詞一覧表）、『新版中日交流標準日本語』（人民教育出版社編2005）（「そうしてください」の説明）であった。
- 2) その他の動詞で、複数名使用していたのは、中級：「する」2名、上級：「する」6名、「言う」3名、「なる」「やる」2名であった。
- 3) 複数名使用は、中級：「こと」「の」2名、上級：「こと」9名、「の」6名、「感じ」5名、「話」「ふう」「もの」「わけ」3名、「気持ち」「点」「問題」2名であった。
- 4) 音声で「そう」は平板型で「聞きました」にかかっており、「後方照応」とした。

参考文献

- 猪股来未（2015）「KYコーパス英語母語の学習者における日本語指示詞の習得過程—「これ」「それ」、「この」「その」各形式の使われ方を中心に—」『言語と文明—論集—』13、47-66
- 大関浩美（2013）「わたしたちは新しい文法をどう学ぶのか—第二言語習得研究からわかってきたこと—」『日本語文法』13（2）、3-18
- 金井勇人・金善花・ジョセッププラウイタ（2011）「日本語と諸言語の指示語の対照について—インドネシア語・韓国語・中国語と—」『埼玉大学国際交流センター紀要』5、17-34
- 北野浩章（2000）「応答やあいづちに用いられる照応的な「そう」について—談話データにみる自然な対話の特徴—」『京都大学言語研究』19、79-94
- 金善美（2006）『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』風間書房

- 小出慶一 (2011) 「日本語学習者の発話に見られるフィラー『こう』について」『埼玉大学紀要 (教養学部)』46 (2)、99-112
- 追田久美子 (1998) 『中間言語研究—日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得—』溪水社
- 追田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』6 (3)、93-110
- 定延利之 (2002) 「「うん」と「そう」に意味はあるか」『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房、75-112
- 島崎英香 (2019) 「話し言葉における日本語学習者の副詞の使用実態—I-JASを用いて韓国語話者を中心に—」『日本語・日本語教育』3、65-84
- 人民教育出版社・光村図書出版株式会社編 (2005) 『新版中日交流標準日本語』人民教育出版社
- 西口光一 (2011) 『新装版基礎日本語文法教本』株式会社アルク
- 日本語教育支援協会「J-CATのスコアについて」〈<https://www.j-cat2.org/html/ja/pages/interpret.html>〉(2020年8月7日アクセス)
- 山内博之 (2003) 「OPIデータの形態素解析—判定基準の客観化・簡易化にむけて—」『実践女子大学文学部紀要』45、1-10
- Ellis, N. (2002). Frequency effects in language processing: a review with implications for theories of implicit and explicit language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 143-188.
- Ellis, N. & Larsen-Freeman, D. (2006). Language emergence: Implications for applied linguistics (introduction to the special issue). *Applied Linguistics*, 27 (4), 558-589.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209-230.
- Skehan, P. (1998). *A Cognitive Approach to Language Learning*. Oxford: Oxford University Press.

使用コーパス

データは、国立国語研究所のプロジェクトによる成果『多言語母語の日本語学習者の横断コーパス：I-JAS』（および検索システム）の、対話データを利用した（中納言2.4.2、データバージョン2019.05版）。

執筆にあたり、ご指導くださった大関浩美先生、韓国語の指示詞についてご助言くださった井上優先生、そして貴重なご助言をくださった査読者の先生方に心より御礼申し上げます。また、本研究は、国立国語研究所のプロジェクトによる成果『多言語母語の日本語学習者の横断コーパス：I-JAS』（および検索システム）を利用しました。開発者、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。